

---

## けいざい早わかり 2009年度第15号

# 景気をけん引する輸出の現状と先行き

---

### 【目次】

- Q1. 堅調な輸出が国内景気のけん引役になっているようですね? .....p.1
- Q2. 地域別や製品別の動向はどうなっていますか? .....p.2
- Q3. 今後の輸出の予想を教えてください.....p.4
- Q4. 輸出にばかり頼っていて大丈夫でしょうか? .....p.4

三菱UFJリサーチ & コンサルティング株式会社

調査部 小林 真一郎 ( [chosa-report@murc.jp](mailto:chosa-report@murc.jp) )

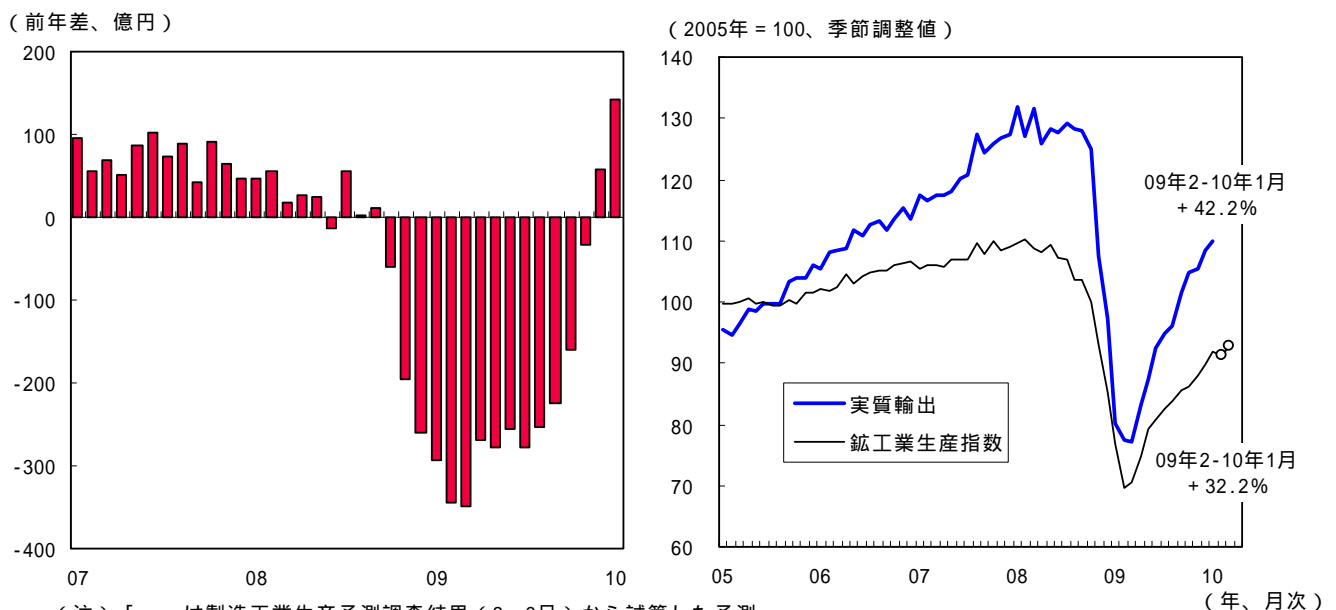
〒108-8248 東京都港区港南 2-16-4

TEL: 03-6711-1250

Q1．堅調な輸出が国内景気のけん引役になっているようですね？

- ・輸出は海外経済が急速に悪化した2008年の秋以降、急速な勢いで減少しました。その後、海外経済が回復してきたことを受けて前年差のマイナス幅が徐々に縮小し、2009年12月によやく前年の水準を上回るまで回復しました（図表1）。
- ・一方、国内の景気は、2009年の春先に底を打って持ち直しに転じていますが、その原動力となったのが輸出の増加です。たとえば、鉱工業生産指数は2009年2月～2010年1月までの間に3割強増加しましたが、これに対し同じ時期の実質輸出（輸出金額を輸出物価で割り引いて算出したもの）は4割強も増加しています。国内で生産された工業製品は、基本的には国内に出荷されるか、海外に輸出されますので、内需に対して外需がいかに強いかがわかります。
- ・輸出の増加によって直接のメリットを得るのは、輸出品の製造に関わっている製造業や、その運搬などに関わっている一部の非製造業にとどまります。しかし、こうした製造業や一部の非製造業の収益が回復してくると、そこで働いている人の賃金が増加したり、新規の雇用を生み出すことにつながります。さらに、輸出品を製造するために新規に機械を購入するといった設備投資の増加も促します。こうして、輸出の増加は次第に輸出に関係する以外の業種にも影響が及んでくることが期待されます。
- ・ただし、国内の経済活動の水準がまだ低いため、企業が抱える雇用と生産設備は過剰な状態が続いています。このため、輸出の増加が内需の押し上げに本格的に寄与してくるまでには、まだ時間がかかりそうです。

図表1．回復が続く輸出の動向

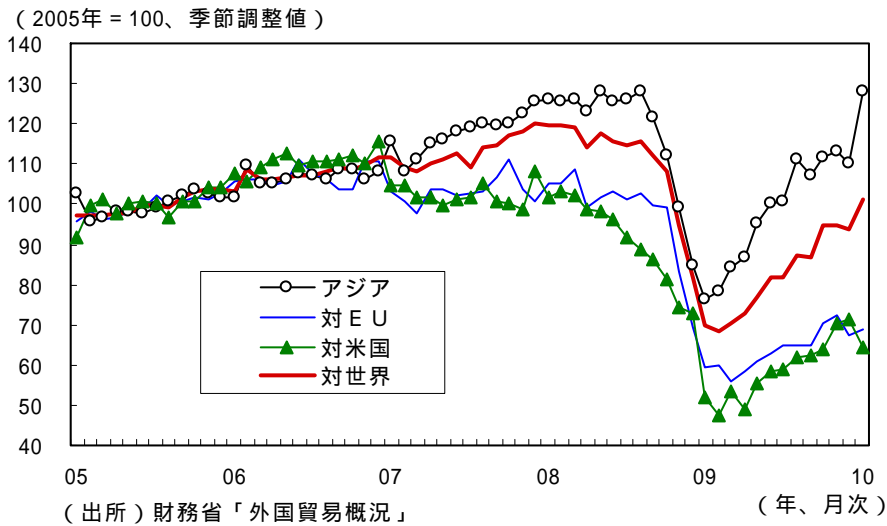


（注）「 」は製造工業生産予測調査結果（2、3月）から試算した予測  
 （出所）財務省「外国貿易概況」、経済産業省「経済産業統計」、日本銀行「金融経済統計月報」

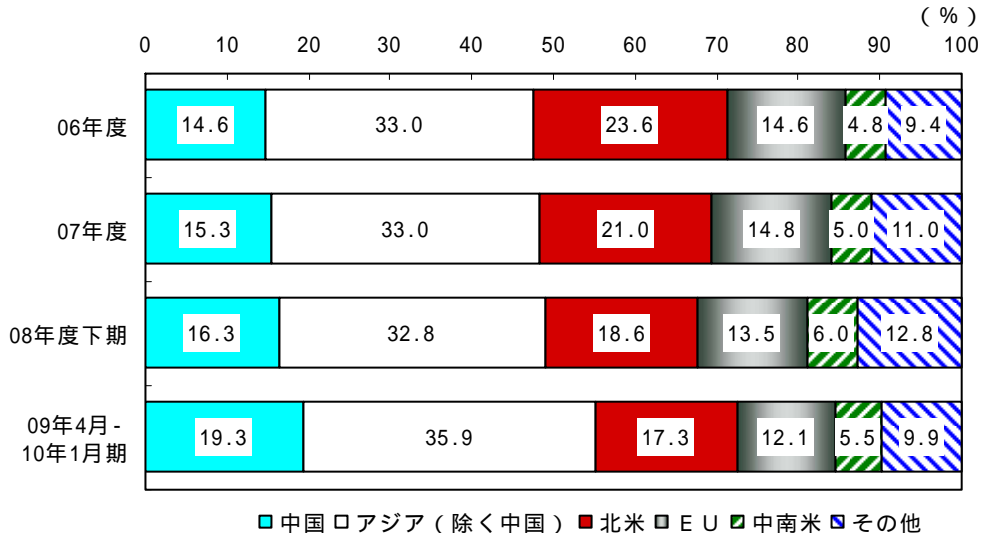
Q2. 地域別や製品別の動向はどうなっていますか？

- ・地域別では、中国を中心としたアジアへの輸出が急速に回復しています（図表2）。輸出数量指数で見ると、2010年1月にはアジア向け輸出はリーマン・ショック前の水準にまで回復しました。一方、欧米向けの輸出も回復はしていますが、足元では逆に減少に転じるなど、その回復テンポは鈍いままです。
- ・リーマン・ショック前の時期（2006、2007年度）、リーマン・ショック直後の時期（2008年度下期）、足元の輸出の回復期（2009年4月～2010年1月）に分けて、各国向けの輸出のシェアをみると、アジア（含む中国）のシェアが高まる一方、米国のシェアが急低下していることが目立ちます（図表3）。もともとアジア（含む中国）へのシェアが増加する傾向にはありましたが、リーマン・ショック後はこの傾向が一段と強まっています。足元の輸出の回復期においては、アジア（含む中国）のシェアが50%を越えており、アジア向け輸出の好調が日本の景気の持ち直しに大きく寄与していることがうかがえます。

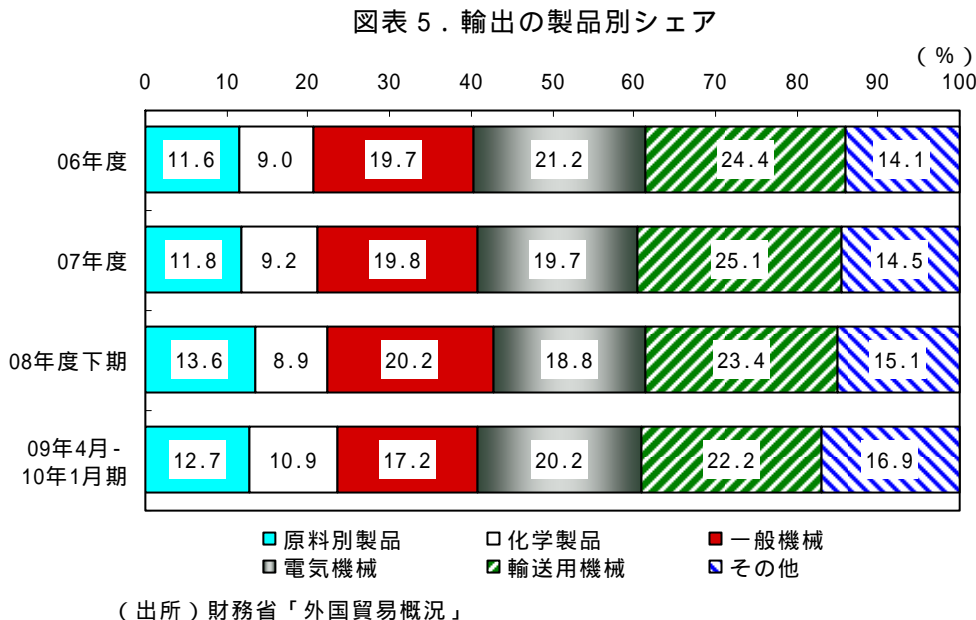
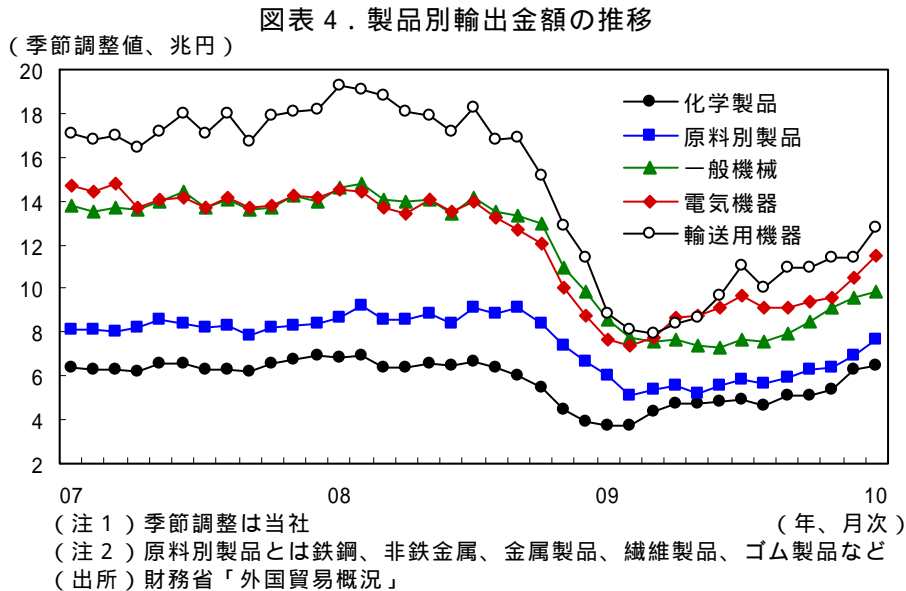
図表2. 地域別輸出数量指数の推移



図表3. 輸出の地域別シェア



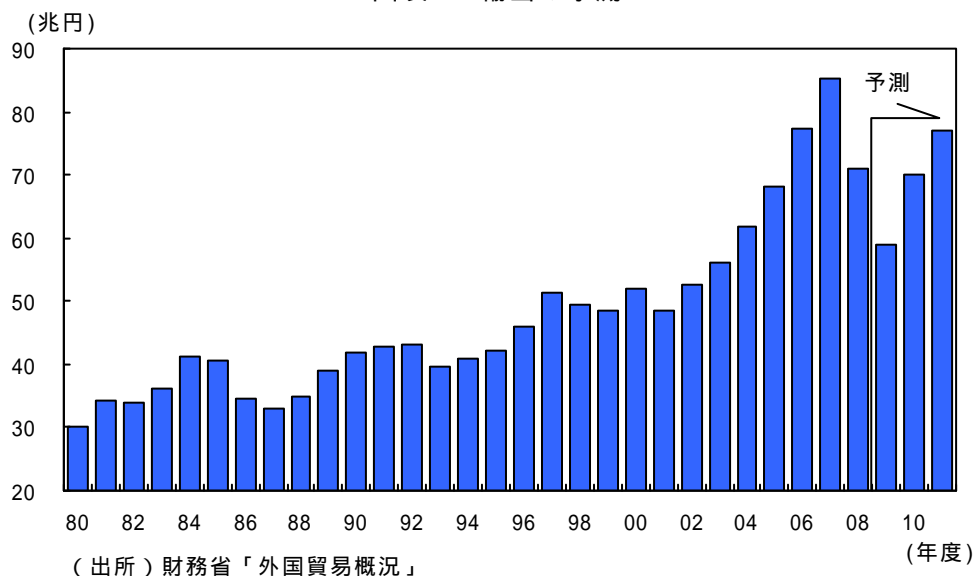
- ・次に製品別の輸出動向をみると、日本の主力輸出品については概ね堅調に増加しています。最も底打ちが早かったのが、中国で需要が急増している化学製品であり、続いて自動車や電子部品・デバイスを含む電気機器が持ち直しに転じました。各国の設備投資の回復が遅れたため一般機械は低迷が続いていましたが、足元では増加に転じています。
- ・同様にリーマン・ショック前、リーマン・ショック直後、足元の各期に分けて、製品別の輸出シェアをみると、電子部品・デバイスが好調な電気機器はすでにリーマン・ショック前のシェアに戻っていますが、自動車や一般機械のシェアは落ちたままです。代わって、素材製品である原料別製品、化学製品のシェアが高まっていますが、これはアジア（含む中国）向けの素材製品の輸出が増えているためです。こうした製品のアジアでの需要は今後も堅調に推移する可能性があり、これまで加工製品が中心であった日本の輸出構造が素材製品に徐々にシフトしていく可能性があります。



Q3 . 今後の輸出の予想を教えてください

- ・輸出は今後も増加が続くと予想されます。2009年度は59兆円程度と、2003年度以来の低水準にとどまりそうですが、2010年度は約70兆円、2011年度には約77兆円（2007年度、2006年度に続く過去3番目の高水準）と順調に回復していく見込みです。もちろん、輸出が順調に伸びていく前提として海外経済の回復の継続があることは言うまでもありません。このように、2010～2011年度については、輸出の増加が景気をけん引する状況が続くと期待されます。
- ・地域別では、アジア（含む中国）への輸出が引き続き主力となりそうです。製品別では、素材製品や電子部品・デバイスが好調を維持しそうです。

図表6 . 輸出の予測



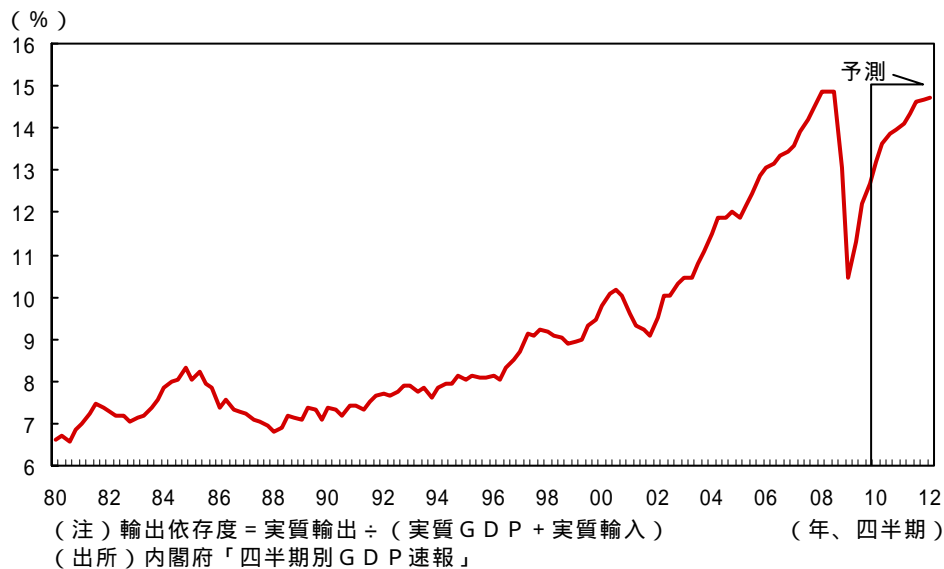
Q4 . 輸出にばかり頼っていて大丈夫でしょうか？

- ・もちろん、内需と外需がバランスよく拡大することが望ましい姿ではありますが、景気が回復する初期の段階にあっては、内需の勢いが弱い以上は外需に頼ることもやむを得ません。過去にも輸出主導で景気が回復した例はあります。しかし、あまりに輸出に頼り過ぎることにもリスクがあります。
- ・日本の経済成長がどのくらい輸出に依存しているのかを示す輸出依存度の過去の推移をみると、2002年ごろから上昇ペースが速まり、2008年には過去最高水準を更新しています（図表7）。2002年1月～2007年11月までは景気の拡大が続き、当時戦後最長の景気拡大期であった「いざなぎ景気」を抜いて拡大の最長記録を更新した時期です。この時期においても景気拡大の最大の原動力が輸出である一方、個人消費や設備投資といった内需の回復は遅れ気味でした。結局、2002年1月～2007年11月までの景気拡大期は年率で2.0%の成長を達成しましたが、そのうち1.3%が輸出によるものでした（輸入を差

し引いた外需寄与度では0.8%であった一方、内需寄与度は1.2% )

- ・しかし、輸出に頼り切った成長は、決して安定したものではありませんでした。2008年秋に発生したリーマン・ショック後の世界経済の混乱によって輸出が急減すると、日本の景気は総崩れになってしまいました。輸出以外にしっかりした成長の柱がなかったのです。このため、世界的な金融市場の混乱の震源地が米国であり、日本の金融機関への悪影響が小さかったにもかかわらず、日本の景気の落ち込み幅が先進国の中で最も大きくなってしまいました。
- ・輸出の急減を受けていったん輸出依存度は急低下しましたが、足元では輸出回復、内需の持ち直しの鈍さを反映して再び上昇しつつあり、今後さらに上昇することが予想されます。このため、足元の景気の持ち直しの動きは、引き続き海外経済の動きに左右されやすいという意味で、不安定な基盤の上に成り立っているといえるでしょう。長期間にわたって安定成長を続けるためにも、いずれは内需主導の景気回復を達成する必要があります。

図表7. 輸出依存度の予測



お問合せ先 調査部 小林 真一郎  
E-mail : [chosa-report@murc.jp](mailto:chosa-report@murc.jp)

- ご利用に際して -

- 本資料は、信頼できるとされる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。
- また、本資料は、執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一した見解を示すものではありません。
- 本資料に基づくお客様の決定、行為、及びその結果について、当社は一切の責任を負いません。ご利用にあたっては、お客様ご自身でご判断くださいますようお願い申し上げます。
- 本資料は、著作物であり、著作権法に基づき保護されています。著作権法の定めに従い、引用する際は、必ず出所:三菱UFJリサーチ&コンサルティングと明記してください。
- 本資料の全文または一部を転載・複製する際は著作権者の許諾が必要ですので、当社までご連絡下さい。